

《福田恒存『近代の宿命』文を通して「イスラム世界」を見ると》: 比較圖は次頁

以下は、西歐近代の本質を見事に捉へて、洵にダイナミズムのある文章だと思へる。

\*「萬人をその胸に救ひとる人格神が、その手をその脚を、さらにその胴體をもぎとられ、それらが制度化せられ機械化(A)せられる――で、神は人體を失つて、完全な精神としての抽象化を受ける。その精神が文學の領域(B)として残されるといふわけだ」。

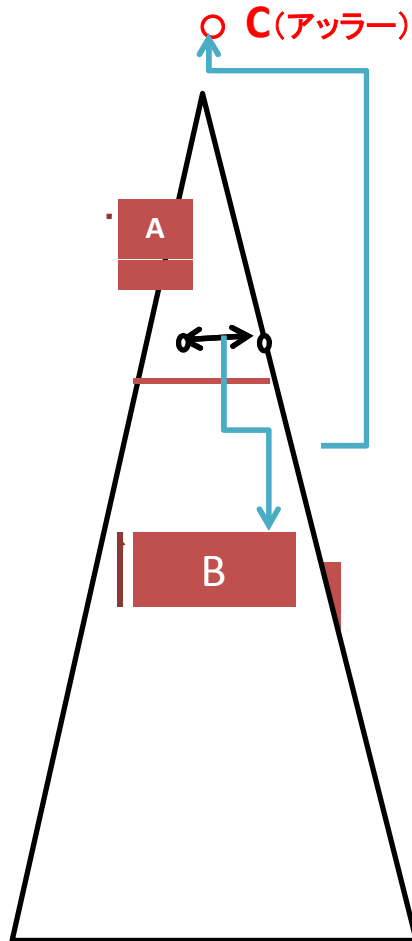
\*「近代ヨーロッパは神を見失つた――が、それはただ神の解體と變形と抽象化とを意味するに過ぎぬ。まさにそのための手続きであり過程にすぎなかつたヨーロッパの近代精神とその政治制度・經濟機構(A)」。(『近代の宿命』全二P463・P466)

そして、其處から、今日のイスラム世界へと眼を轉ずるに、その根柢には、上記本質の不理解から來る西歐近代への「適應異常」と、それが原因のルサンチマン(弱者の歪曲された優越意思)的現象があるのではなからうかと小生には思へるのである。

ルサンチマン(弱者の歪曲された優越意思)的現象とは即ち、「A領域(集團的自我:政治制度・經濟機構)への不満⇒B領域(個人的自我・神に従屬する自己)への逃げ込み⇒アッラーの神(C)絶對優位化(原理主義的過激化)」の圖である。**参照⇒次頁**

近代化を経なかつた彼等の神(アッラー)は、當然の事「近代精神とその政治制度・經濟機構」による「神の解體と變形と抽象化」(A的客體化)とを受ける事がなかつた。その結果として、「A・B」の分離が充分に利かず、「神に従屬する自己(B:個人の純粹性)」にも不純物が残留してしまつた。その爲に「ルサンチマン」(弱者の歪曲された優越意思)的自己欺瞞にも陥つてしまつたと言ふ譯である。

**\* ルサンチマン(弱者の歪曲された優越意思)的現象・・・「A領域(集團的自我:政治制度・經濟機構)への不満⇒B領域(個人的自我・神に從屬する自己)への逃げ込み⇒アッラーの神(C)絶對優位化(原理主義的過激化)」の圖である。**



\*「萬人をその胸に救ひとる人格神が、その手をその脚を、さらにその胴體をもぎとられ、それらが制度化せられ機械化(A)せられる——で、神は人體を失つて、完全な精神としての抽象化を受ける。その精神が文學の領域(B)として残されるといふわけだ」。

\*「近代ヨーロッパは神を見失った——が、それはただ神の解体と變形と抽象化とを意味するに過ぎぬ。まさにそのための手續きであり過程にすぎなかつたヨーロッパの近代精神とその政治制度・経済機構(A)」。(『近代の宿命』全二P463・P466)

